

子供と繪 (一)

野 生 司 香 雪

凡そ人は生れながらにして美なる物体に親まんとするの趣味をもつと云ふことは何れの國何れの人種を問はず皆なこれ人間固有のものである、されどこの先天的に具へて居る美感は極めて幼稚なものであるがこれを發達させるには是非教育の力を以てせなければならん、そこで子供の時からこの美感を養成する方法としては繪を以てすることが最も簡便なのである、この繪の練習は一つに趣味を高尚ならしむるのみならず凡て物の觀察を緻密ならしめて記憶方を養ひ想像力を練ると云ふことが出来るので心意發達上極重すべきものであれば子供の時代から其作用を促して置かないと大きくなるに従ふてこの創造的想像力を養成することは次第に六ヶ敷なるから子供の時より繪に親しませ之を畫くの能を得せしむると云ふことが最も必要だ乍而之を教育する其の方法の如何によりて

は稍々もすると子供をして畫くことを忌むと云ふ傾向の弊に陥ることがある蓋し普通の圖書教授法の如く臨書寫生講等のものは或筋肉神經の興奮によりて一定の運動を要さざれば其看取せる物体を畫くことが出来ないのであるから五六才乃至六七才の子供には先づ不可能と云ふてもよろしい、そこでこの六七才の子供に畫かしむる繪と云ふものは子供が常に喜ぶべき物体の其特征を捉へてこれを極單易に畫かせる様に努めなければならん其方法としては子供の意識の上つて居るところの材料を捉へて其の順序は子供の心意の働きの状態に従はなければならんのであるからして一定の方式には依らずして子供の視覺にありて感ずるまゝの物体を隨意に畫かしむるのである而しながら子供はこの感ずるまゝを畫くの能極めて不完全なれば之を畫くべき方法の極單易なるものを常に教示して置くことが必要である今これを圖に依りて述べましや

(次頁の略畫参照)

